

| | |
|------------------|---|
| Title | ソ連・東欧の貿易関係 |
| Sub Title | The trade between Soviet Russia and Eastern Europe |
| Author | 加藤, 寛 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1962 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.28(28)- 47(47) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19620101-0028 |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0028 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソ連・東欧の貿易関係

加藤 寛

《本論文は関西学院大学、丹羽春喜氏との共同研究の一部であるが、文章の責任は加藤にある。》
 近年積極化してきたソ連の貿易活動がいかなる形でどのようなにおこなわれているかについて、われわれはまだ十分な知識をもっていない。本論文はこの問題を少しでも明らかにしたいという意図から書かれたものである。
 まずソ連・東欧貿易の現状認識からはじめよう。

(1) ソ連貿易の推移

ソ連の貿易を全体としてみると、第一表のように変化している。もちろん社会主義諸国との貿易が中心であるが、資本主義諸国との貿易も増大している。

輸出入構成を戦前と比較すると、機械・設備の比重が急増し、最も重点をおいてスターリン時代から生産されてきた機械・設備の急増しているのがまず注目される。また消費財の出減・入増はソ連国内経済からみて考えられるところである。ソ連の貿易構成にあらわれた変化は、国内工業生産の上昇の結果として、ソ連が社会主義諸国の経済建設に対する最大の

(第1表) ソ連貿易額 (百万ルーブル)

| | 1955年 | 1956年 | 1957年 | 1958年 | 1959年 |
|----------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 総額 | 25935.7 | 28897.0 | 33277.4 | 34588.7 | 42056.3 |
| 内輸出 | 13693.5 | 14446.3 | 17526.1 | 17190.2 | 21763.3 |
| 内輸入 | 12242.2 | 14450.7 | 15751.3 | 17398.5 | 20293.0 |
| 社会主義諸国総額 | 20565.6 | 21861.0 | 24520.3 | 25512.9 | 31654.4 |
| 内輸出 | 10892.3 | 10917.9 | 13217.8 | 12545.0 | 16495.9 |
| 内輸入 | 9673.3 | 10943.1 | 11302.5 | 12967.9 | 15158.5 |
| コメコン諸国総額 | 13819.7 | 14331.3 | 17858.6 | 18103.3 | 21880.0 |
| 内輸出 | 7168.6 | 7071.2 | 10199.4 | 9280.5 | 11801.9 |
| 内輸入 | 6651.1 | 7260.1 | 7659.2 | 8822.8 | 10078.1 |
| 資本主義諸国総額 | 5370.1 | 7036.0 | 8757.1 | 9075.8 | 10401.9 |
| 内輸出 | 2801.2 | 3528.4 | 4308.3 | 4645.2 | 5267.4 |
| 内輸入 | 2568.9 | 3507.6 | 4448.8 | 4430.6 | 5134.5 |

cf. 「外国貿易」 No. 8. 1960.

(第2表) ソ連輸出入構成 (%)

| | 1938年 | | 1950年 | | 1958年 | |
|-------|-------|------|-------|------|-------|------|
| | 輸出 | 輸入 | 輸出 | 輸入 | 輸出 | 輸入 |
| 機械・設備 | 5.0 | 34.5 | 11.2 | 21.5 | 18.5 | 24.5 |
| 金属製品 | 1.6 | 25.4 | 8.5 | 7.2 | 16.4 | 7.3 |
| 鉱石 | 2.2 | 2.7 | 2.2 | 5.8 | 4.4 | 9.3 |
| 燃料 | 8.8 | 1.2 | 3.9 | 11.8 | 15.2 | 4.9 |
| 木材 | 20.3 | — | 3.1 | — | 5.6 | — |
| 繊維原料 | 4.2 | 9.7 | 11.2 | 7.7 | 6.8 | 7.1 |
| 穀物 | 21.3 | — | 12.1 | — | 8.3 | — |
| 工業消費財 | 7.9 | 1.0 | 4.9 | 7.4 | 3.6 | 14.4 |
| ゴム | — | 3.5 | — | 3.5 | — | 4.2 |
| 食糧原料 | — | 12.7 | — | 17.4 | — | 14.9 |
| 毛皮 | 9.4 | — | 2.3 | — | 0.8 | — |

cf. オルロフ「経済学の諸問題」 No. 5. 1959.

供給国となっている(第2表参照)。コメコン(又はシマあるいはセフ)社会主義圏経済相互援助会議)加盟諸国に対する輸出は機械・設備を筆頭に金属切断機・乗用車・ローラー・ベアリング、石油採掘設備、コンバインなどがいちじるしく増加している。そのほか、燃料・金属および各種原料、なかでも原綿輸出が大きく、またコメコン諸国の穀物需要の大部分はソ連が供給している。

次に、ソ連の共産諸国からの輸入は、製品の割合が増え、原料商品は次第に減少している。機械・設備はコメコン諸国からの輸入の半分に達し、

ソ連・東欧の貿易関係

その他、綿織物・絹織物・スフ・野菜などの輸入が大きい。
次に貿易の決済方法はどうかをみてみよう。

(2) 決済方法

第八回コモン（一九五七・六）で多角決済協定が調印され、二国間協定から生じた貸借の相殺、協定外の商品供給による決済をおこなうことになった。しかしこの多角決済は、商品流通の拡大をねらった二国間決済方式の拡大・補充にすぎず、清算局（ソ連ゴスバンク）は短期信用を与えるのみで、長期信用の供与などはおこなっていない。こうなると、後進国は先進国の生産財に対し大きな需要をもつても支払い能力が十分でないため、物資流通が阻害されるようになる。ソ連のクレディット、東独・チェコの共同クレディットなどこの欠点を補なうものではあるが、専門の社会主義共同銀行のごとき、コモン諸国の出資による共同銀行をおこなわない限り完全ではあり得ない。ブルガリアは現在この対処策として、一九五八年十月にはソ連から三、三〇〇万ドルを借款し、一九六〇年には東独から八〇〇万ドル、ソ連から五、四〇〇万ドルのクレディットを受ける交渉をした。ハンガリーも一九五八年十一月十二月にソ連から一億ドルのクレディットを受けている。アルバニアはソ連から一九五八・六〇年分として四、七〇〇万ドルのクレディットと未処理債務の棒引きをもらっている。

しかし生産の多角性は当然、融資・決済の多角性を必要とするので、決済はようやくコモンの主要問題になりつつある。次にビストロフの論文によってその内容を述べてみよう（『経済学の諸問題』一九六〇年二号）。

社会主義世界市場の商業的かつ他の経済的關係によって、社会主義諸国間の通貨と決済とが決められる。社会主義諸国間の経済關係は、相互援助と協力とを反映し、相互の独立を尊重する。経済關係の種々な形態は、経済発展計画に密接な協業と生産における協力・専門化の程度によって定められる。

社会主義諸国間の貿易量は、生産と生活水準の上昇ともなつて増大する。コモン諸国の交易は一九五八年に比べて七〇％増大する。

長期貿易量の増大と他の経済契約の発展から、社会主義諸国間の決済關係は、一年先に計画されるだけでなく、一般的には数年先の決済が考えられている。

コモン諸国間の国際決済は三つに分けられる。(a)通常貿易すなわち商品の輸出と輸入および貿易に対する国際決済、(b)クレディットと借款に関する国際決済、(c)非商業取引に関する国際決済。

貿易や支払に就いての政府間の契約は、信用供与契約や非商業的決済契約と同じくルーブルでなされる。商品の価格もその支払もルーブルでなされる。またこれら諸国の中央銀行の間の決済はルーブルでおこなわれる。社会主義諸国の国際取引において、商品の価値尺度であり通貨決済の手段であるのみでなく、購買・支払の手段である。このようにルーブルが決済手段である限り、ルーブルの他の通貨に対する交換比率の問題は生じない。

国際決済の制度は、外国貿易の発展を刺激し、経済關係の他の形態を進展させ、商品と他の機能のために支払を確実にするために作られている。

社会主義諸国間の決済はルーブルでなされる。ルーブルは純金〇・二二二二六八グラムを含む国際決済の通貨である。社会主義諸国間におけるルーブルの購買力は、世界市場においてもルーブルに含まれる金と同じ購買力である。

たとえば、外国貿易機構がその契約を遂行してからその支払（もちろんルーブル表示）はこれもまたルーブル表示の清算勘定を通じておこなわれる。ルーブル交換比率は、世界市場の商品の価格をルーブル価格に変えるときに用いられる。この変更はルーブル含有の金量にもとづいた公定比率でなされるのである。またルーブル交換比率は一方において人民民主主義国家の中央銀行と地方においてこれらの国々の貿易機構との間の国内輸出入決済に用いられている。この決済は、諸国の通貨

に対するルーブルの公定比率にしたがってなされる。

清算方式は社会主義諸国によって用いられている決済の勘定方式である。もちろんこれは資本主義諸国間でも使われているが、その意味は通貨の偏在のためなのであって、社会主義では、取引の計画的調整のために使われている。清算勘定は次の場合に用いられる。

- (1) 債務国からの輸入に対する支払。
- (2) 第三国から輸入した商品の支払。(これは債権国・債務国・第三国の間に協定が必要である。)
- (3) 多角清算勘定への振替。(これは債権国と債務国との間に協定が必要である。この場合にはこの清算制度に属するどの国からでも商品を購入することができる。)
- (4) 債務国の国内通貨受取。(債務国内における貿易外支払にあてる。)
- (5) 債務国または第三国にクレジットを供与する。

清算勘定は、貿易のためと、非商業活動のためとの二つの方式がある。国際決済の大部分は中央銀行の貿易清算勘定口座を通じてなされている。

清算勘定についての受取と支払は全体として一年間でバランスしなければならない。しかし、季節的な生産物であるとかその他の事情(たとえば、非常に大きな商品引渡しなど)のために短期間に清算するということは不適当であることもあろう。このような場合は、契約によって決められ、一般には、取引量が大きい程、清算についての相互信用の限界は高くなる。

また、期間中の商品引渡し量の変化などによって、期末に清算ができない場合がでてくる。この場合は次期繰越となる。これは現在社会主義諸国が採用している方法であるが、この場合、次期取引高計画は、債務国の引渡し額が相手国の引渡し額を超過するということになる。

利子は、債権国における物質的生産の付加価値を他の国に与えたという意味で支払されると同時に、資源の生産的使用を奨励するという役割をもっている。利子率は契約によって二%と固定されている。

(3) 貿易マトリックス

さて、知識的には以上のように、ソ連を中心として、東欧の経済協力・貿易関係がどのようになされているかが、次第に明らかになってきたのであるが、しかしなお、多角決済がどのような規模でおこなわれているか、あるいはソ連の役割についての計量的なことについては、われわれはきわめて断片的な知識しかもち得ないのである。

そこでまずその手がかりとして、第一に貿易マトリックスを作成することにした。貿易マトリックスについては、すでにECEが一九四八―五六年の各年度について推計しているが、後述するように、あまり精度の高いものではない。さらに一九五六年を転期として圏内貿易が活潑化したことを考えると、むしろ、それ以後のマトリックス作成が重要であると考えられる。

(注) U. N. ECE, Economic Survey of Europe in 1957, Chap. VI, p. 35.

そこでハンガリー暴動の余波も静まり、「コメコン」の活動が休眠期を脱してから以後、正常な年と考えられる。一九五七年についてマトリックスを作成した^(注)。しかしこの年度の貿易額は、若干の国について照合が十分できないという資料的な制限があった。それ故、われわれはさらに進んで一九五八年をとりあげたのであるが、この年度はそれ以前・それ以後に比して、もっとも資料的に満足すべき年度であると考えられる。

(注) 丹羽春喜「共産圏貿易マトリックスの推計」(経済学論究、第一五巻一号)。

作成にあたって注意すべき点は次のことである。

ソ連・東欧の貿易関係

(第 3 表)

| | 貿易記号 (国連分類 による) | 再輸出の有 無 | 修理貿易の有 無 | 輸出評価 | 輸入評価 | ベース | 備考 |
|-------|-----------------------|------------|-------------|--------|--------|--------------|--------------------------------------|
| アルバニア | S | 含む (?) | 含む (?) | f.o.b. | c.i.f. | 通関ベース (?) | |
| ブルガリア | G | 含む | 含む | f.o.b. | f.o.b. | 通関ベース | 数字は、ブルガリア国境を越えない商品の対外国取引を含む。 |
| チェコ | G | 含む | 含む | f.o.b. | f.o.b. | 通関ベース | |
| 東ドイツ | (S) | 含まず | 含まず | f.o.b. | f.o.b. | 為替ベース (?) | |
| ハンガリー | G | 含む | 含む | f.o.b. | c.i.f. | 通関ベース | ハンガリー国境を越えなくとも、外国に再販売した商品はこれを含む。 |
| ポーランド | G | 含む | 含む | f.o.b. | f.o.b. | 通関ベース | |
| ソ連 | S | 含む | 含む | f.o.b. | f.o.b. | 通関ベース | 商品の対外国取引は、たとえその商品がソ連国境を越えなくとも、それを含む。 |

(一) 貿易取引額のデータには、輸出国側の数値と輸入国側の数値とがあり、この両者は理論的には一致するはずであるが、実際にはかなりの誤差がある。cif or fob あるいは「一般貿易」、「特別貿易」の差だけでなく、通関ベースと、為替ベースの差、時差など、集計・評価手続上の差異があるからである。この難点を避けるため、IMF・国連では輸出国側データを優先することを原則としているので、ここでもその原則に従うこととした。

(二) cif を fob に換算し、もし為替ベース統計であればこれを通関統計で統一することにした。再輸出や修理貿易が含まれているか否かの吟味も必要であるが、これは通関ベースと為替ベースとの差に関連していることが多いし、「一般貿易(国連分類符号G)」と「特別貿易(国連分類符号S)」との差異も、商品の保税倉庫への出入記述法に関するもので微細であるから、ここでは無視した。

cif を fob に換算するためには、一〇%割引くのが国連慣行であるが、ここでは、東欧諸国はほとんど隣接国なので、隣接国でない場合のみ五%割引き、さらにアジア共産圏との貿易のみ一〇%割引きの慣行にしたがった。

またほとんどの国は通関統計であるが(たとえばソ連の「貿易統計集」

序文をみよ)、東独だけは、一般に相手国側資料による数値に比してかなり下回っているし、東独統計には再輸出および修理貿易が含まれていないことから推して、為替ベースの認可統計ではないかと考えられる。そこで輸入統計には一〇%、輸出

(第 4 表) 1958 年共産圏貿易マトリックス (公定レート換算 100 万ドル) f.o.b.

(*は推定)

| 輸出入 | (1) アルバニア | (2) ブルガリア | (3) チェコ | (4) 東独 | (5) ハンガリー | (6) ポーランド | (7) ルーマニア | (8) 資本主義諸国 | (9) ソ連 | 輸出合計 |
|--------------|-----------|-----------|---------|--------|-----------|-----------|-----------|------------|--------|---------|
| 輸入 | 1.1 | 4.9 | 2.6 | 1.6 | 2.6 | 0.5 | 1.4 | 13.7 | 14.5 | 29.2 |
| 輸出 | 2.3 | 40.9 | 29.8 | 7.9 | 19.6 | 3.2 | 56.6 | 201.6 | 12.8 | 374.7 |
| (3) チェコ | 9.6 | 36.3 | 157.5 | 77.5 | 95.0 | 37.8 | 473.0 | 497.0 | 214.4 | 1513.7 |
| (4) 東独 | 5.7 | 39.3 | 162.0 | 71.5 | 155.5 | 36.2 | 476.0 | 816.0 | 146.0 | 1908.2 |
| (5) ハンガリー | 3.8 | 9.8 | 92.5 | 75.2 | 33.6 | 15.1 | 230.0 | 158.7 | 962.0 | 660.7 |
| (6) ポーランド | 4.8 | 17.1 | 72.5 | 28.6 | 12.5 | 13.6 | 474.0 | 265.2 | 220.7 | 660.7 |
| (7) ルーマニア | 2.8 | 4.7 | 22.6 | 14.1 | 12.5 | 13.6 | 474.0 | 265.2 | 220.7 | 1059.2 |
| (8) 資本主義諸国 | 2.5 | 53.9 | 415.0 | 572.0* | 196.0 | 542.0 | 155.3 | 1158.5 | 608.0* | 3703.2 |
| (9) ソ連・ソ連共産圏 | 44.4 | 200.6 | 446.8 | 800.0 | 200.5 | 376.9 | 1211.9 | 1158.5 | 1766.5 | 3703.2 |
| 輸入合計 | 77.6 | 373.8 | 1355.2 | 1896.7 | 631.7 | 1278.7 | 530.7 | 3624.3 | 4331.6 | 15931.7 |
| 輸出合計 | 1.7 | 11.0 | 98.0 | 123.0* | 34.0 | 41.0 | 17.7 | 585.0* | 985.6 | 1831.4 |
| | | | | | | | | | 1831.4 | 15931.7 |
| | | | | | | | | | 6163 | |

統計には三%の加算修整をおこなった。

以上の点を考慮して第四表の貿易マトリックスを作成した。一九四八―五六年のECEマトリックスは、第一に輸出側データと輸入側データとの照合をおこなっていないし、第二に、東独統計の特殊性が無視されているし、第三にソ連貿易公表の不十分な時代であったため大幅な誤差を生じている。^(注)

(注) ソ連の貿易統計公表は一九五五年以降であるが、アレングが示すように、一九五七年になってはじめて精度が若干向上しているのではないかと思われる。

A. L. Allen "A Note on Soviet Foreign Trade Statistics" Soviet Studies, Vol. X, No. 4.

第四表から「貿易係数」(輸入係数ともよぶが、クイオおよびリヤンの呼称にならった)を算出し、さらに逆行列表を作成した。これは通常の産業連関分析の場合と全く同じように使用できるものであって、外生化された国(ソ連および中共)の輸入額のベクトルを右からこれに掛ければ、それに応じた各国の輸出総額を求めることができる。こうして、外生国の輸入パターンの変更が、東欧諸

(第5表) 1958年共産圏貿易係数表

| | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| (1) | | 0.0029 | 0.0032 | 0.0014 | 0.0024 | 0.0025 | 0.0011 | 0.0004 |
| (2) | 0.0788 | | 0.0270 | 0.0156 | 0.0116 | 0.0185 | 0.0068 | 0.0153 |
| (3) | 0.3278 | 0.0969 | | 0.0825 | 0.1139 | 0.0897 | 0.0807 | 0.1277 |
| (4) | 0.1952 | 0.1049 | 0.1071 | | 0.1051 | 0.1468 | 0.0774 | 0.1286 |
| (5) | 0.1301 | 0.0262 | 0.0611 | 0.0394 | | 0.0317 | 0.0322 | 0.0621 |
| (6) | 0.1644 | 0.0463 | 0.0479 | 0.0556 | 0.0420 | | 0.0290 | 0.1280 |
| (7) | 0.0959 | 0.0125 | 0.0149 | 0.0158 | 0.0207 | 0.0118 | | 0.0314 |
| (8) | 0.0856 | 0.1438 | 0.2742 | 0.2997 | 0.2878 | 0.5117 | 0.3318 | |

(第6表) 1958年逆行列表

| | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) |
|-----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| (1) | 1.0042 | 0.0045 | 0.0049 | 0.0037 | 0.0043 | 0.0049 | 0.0029 | 0.0026 |
| (2) | 0.1161 | 1.0170 | 0.0459 | 0.0348 | 0.0336 | 0.0473 | 0.0274 | 0.0351 |
| (3) | 0.4945 | 0.1816 | 1.1170 | 0.1894 | 0.2295 | 0.2546 | 0.1950 | 0.2232 |
| (4) | 0.3982 | 0.1986 | 0.2250 | 1.1241 | 0.2332 | 0.3120 | 0.2024 | 0.2395 |
| (5) | 0.2211 | 0.0723 | 0.1153 | 0.0947 | 1.0634 | 0.1173 | 0.0921 | 0.1123 |
| (6) | 0.2990 | 0.1159 | 0.1390 | 0.1442 | 0.1401 | 1.1142 | 0.1263 | 0.1974 |
| (7) | 0.1391 | 0.0327 | 0.0410 | 0.0409 | 0.0485 | 0.0509 | 1.0270 | 0.0529 |
| (8) | 0.4821 | 0.3469 | 0.4983 | 0.5096 | 0.5287 | 0.8065 | 0.5502 | 1.2888 |

国の貿易関係および東西貿易に対してどのような波及効果を及ぼすかを分析し得るわけである。^(注)

(注) 第二〇回国際経済学会(於富山大学)において、われわれのこのような分析方法に対して次のような批判がだされたので、簡単にふれておきたい。

第一点。マトリックス分析という近代経済学用具で、社会主義社会という異質なものの分析ができるか。第二点。外生国としてソ連・中共をあげたのは、ソ連が中心となって、東欧を従属化しているという意識があるのではないか。

第一点については、マトリックスの作成が、共産圏内自身からも要求され、貿易の多角化、圏内経済の協力化のためにまず最初に必要基礎資料であるといいたい。もちろん、社会主義的マトリックスはこれとちがう内容をいろいろともちこむことを考えてもいるであろうが(これについては、加藤寛「社会化と経済計画」参照)、現在のところ、これにまさるものは考えられていないようである。まして、このマトリックスは形式であり、むしろこれにこだわることに疑問を感じる。第二点については、外生国としてどの国をもってきたもいろいろわけであるが、圏内貿易においてソ連の占める役割を考えれば、むしろ当然のことではないであろうか。

X_i = i 国の総輸出額, a_{ij} = i 国から j 国へ輸出された額。

F_j = 外生化された国の i 国からの輸入額 ($i, j = 1, 2, \dots, n$) とすると、

$$X_i = a_{i1}X_1 + a_{i2}X_2 + \dots + a_{in}X_n + F_i$$

また 貿易係数 $a_{ij} = a_{ij}/X_j$ が一定なら、

$$X_i = a_{i1}X_1 + a_{i2}X_2 + \dots + a_{in}X_n + F_i$$

これを行列記法で書くと、

$$X = AX + F$$

(X は X_i のベクトル
 A は a_{ij} の行列
 F は F_i のベクトル)

I を単位行列とすると、

$$(I - A)X = F$$

ここで $(I - A)$ にその逆行行列 $(I - A)^{-1}$ が存在すれば、 $X = (I - A)^{-1}F$ によって、 F から X を求めることができる。

cf. Koo & Liang: "The Role of Japan in the Intra-regional Trade of the Far East", The Review of Economics and Statistics, 東欧の貿易関係

(第8表) 逆行列の変化 (1958年~1957年) (小数点4位)

| | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) |
|-----|-------|-----|-------|------|-------|-------|-------|-------|
| (1) | 2 | 2 | - 1 | 0 | - 31 | - 2 | - 42 | - 6 |
| (2) | - 334 | 0 | - 101 | - 4 | - 124 | - 4 | - 125 | - 53 |
| (3) | 1489 | 41 | 40 | 54 | -1064 | - 114 | - 124 | - 344 |
| (4) | 951 | 173 | - 87 | 114 | - 10 | - 468 | - 103 | - 274 |
| (5) | 633 | 136 | 119 | 226 | - 146 | 192 | 142 | 114 |
| (6) | 1052 | 221 | 396 | - 14 | - 596 | 1 | 7 | 9 |
| (7) | 411 | - 7 | - 52 | 28 | - 338 | - 45 | 10 | - 11 |
| (8) | 541 | 94 | - 248 | 377 | -2281 | - 48 | 1028 | -1798 |

ソ連・東欧の貿易関係

- ばある程、貿易乗数値は大となる。それ故、 k の値が小さいことは、ソ連の共産圏内における波及効果、または貿易創出効果が、比較的小さく、むしろ共産圏内貿易は、双務決済貿易を優先し、多角決済貿易は未発達であったと考えてよいであろう。
- しかしもちろん、貿易が相互の利益を促進するという意味からすれば、双務貿易より多角決済が取引のより密接な関係であることはいままでもない。そこで共産圏貿易には、多角決済の動きが着々と進められているようにみうけられる。これを、一九六五年の長期計画貿易額の発展からながめてみよう。
- 一九六五年の長期貿易計画について次の数字が発表されている。
- (1) 「ソ連—チェコ」一九六一—六五年間に貿易額は、過去十五年間の額に等しい。(一九六〇、四、二八、ブラウダ)
 - (2) 「ソ連—ポーランド」一九六五年の貿易額は、五〇億ルーブル以上。(一九六〇、二、三、ブラウダ)
 - (3) 「ソ連—ブルガリア」一九六五年貿易額は一九五八年の六〇%増。(一九六〇、一、四、ブラウダ)
 - (4) 「ソ連—東独」一九六一—六五年貿易額は四二五億ルーブル。(一九六〇、一、二、二、ブラウダ)
 - (5) 「チェコ—ポーランド」一九六五年度貿易額は一九六〇年の八%増。(一九六〇、二、一、一、ANS)

(第7表) ソ連とアジア共産圏を外生部門として

| 貿易乗数値 | e | | k | | |
|------------|--------|--------|--------|--------|-------|
| | 1957 | 1958 | 1957 | 1958 | 1959 |
| (1) アルバニア | 0.0028 | 0.0023 | 0.0058 | 0.0047 | — |
| (2) ブルガリア | 0.0396 | 0.0347 | 0.0692 | 0.0608 | — |
| (3) チェコ | 0.0937 | 0.1017 | 0.2493 | 0.2456 | 0.416 |
| (4) 東ドイツ | 0.1655 | 0.1560 | 0.3287 | 0.3096 | 0.540 |
| (5) ハンガリー | 0.0258 | 0.0358 | 0.0900 | 0.1104 | 0.150 |
| (6) ポーランド | 0.0571 | 0.0555 | 0.1683 | 0.1718 | 0.250 |
| (7) ルーマニア | 0.0411 | 0.0429 | 0.0749 | 0.0759 | — |
| (8) 資本主義諸国 | 0.2878 | 0.2866 | 0.6034 | 0.6008 | — |
| \bar{k} | | | 1.5896 | 1.5796 | |

(注) 三辺信夫氏算出によるアメリカ外生部門の \bar{k} は 1950年=9.780, 1953年=10.329, 1954年=10.550, 1958年=10.051, 1959年=9.553 (「経済学雑誌」第45巻1号)

e は e_i を要素とする列ベクトル
 e_i は A に占める第 i セクターからの輸入額の割合
 A は外生部門の総輸入額
 X_i を第 i セクターの総輸出額とすれば

$$k_i = \frac{\sum_j A_{ji}}{\sum_j X_j}$$

k は k_i を要素とする列ベクトル
 \bar{k} は各セクター貿易乗数の非加重和 (世界貿易乗数)

作成に用いた資料は次のとおりである。
 国連「貿易統計年鑑」Yearbook of International Trade Statistics.
 国連「世界経済年報」World Economic Survey.
 U. N. ECE: Economic Survey of Europe in 1959, 1960.
 " : Economic Bulletin for Europe, Vol. 11, No. 1, 1959.
 Внешторг: Внешняя Торговля СССР за 1958 г.
 Сладковско, Пекшев, Иванов, Золотарев: Развитие Экономики Стран Народной Демократии, 1959.
 Золотарев: Мировой Социалистический Рынок, 1961.

こゝ作成した貿易マトリックスを利用して一九五七年と五八年との貿易乗数値を算出したのが、第七表である(五七年は三辺氏算出)。この算出結果によると、共産圏の貿易乗数値はきわめて小さく、これは表の(注)に示したアメリカの貿易乗数値と全く対照的である。この貿易乗数値の意味するところは、外生国の総輸入額に何らかの変動が生じたとき、それが内生国の輸出額にあたる影響である。したがって、外生国からの輸入依存率が小であればある程、かつ外生国の輸入額に占める内生国の部分 (ϵ) が大であ

- (6) 「ポーランド—ハンガリー」 一九六〇—六五年貿易額は、従来の四〇%増。(一九六〇、三、二一、ブラウダ)
- (7) 「ポーランド—ブルガリア」 一九六一—六五年貿易額は、一九五九—六〇年の二倍。(一九六〇、三、二七)
- (8) 「ソ連—ハンガリー」 一九六五年貿易額は約三〇億ルーブルで、一九五八年の二倍。(一九六〇、五、六、ブラウダ)
- (9) 一九六五年計画

| | | |
|-------|-----|------------|
| チェコ | 輸出額 | 一九五八年の七九%増 |
| | 輸入額 | 七〇%増 |
| 東独 | 輸出額 | 八六%増 |
| | 輸入額 | 六三%増 |
| ハンガリー | 輸出額 | 五五%増 |
| | 輸入額 | 五五%増 |
| ポーランド | 輸出額 | 五九%増 |
| | 輸入額 | 三六%増 |
| ソ連 | 輸出額 | 五〇%増 |
| | 輸入額 | 五〇%増 |

(U. N. Economic Survey of Europe, 1959, Chap. III, p. 45.)

以上の公表を基として、推計したものが、一九六五年の貿易乗数値である。これをみると、五八年に比してはとほ大となるから、外生国からの輸入依存率は小さくなり、圏内の内部交流の盛んになることがうかがわれる。

一九五七年と五八年に関する限り、貿易係数に大きな変動がみられないので（第八表）、一応われわれは、貿易係数を安定

値として考えたが、計画経済国の常として、あるいは一九六五年には貿易係数が大きな変動をみせるかもしれないが、目下のところは、その情報はないので、安定したものとみなしている。

さて次にわれわれは、輸出入価格を通じてのソ連と東欧との結びつき方を検討してみよう。

(4) 差別価格の検討

ソ連のスポークスマンは、共産圏の貿易は世界市場価格にふさわしい価格でおこなわれていると主張しており、とくに、一九五六年のポーランドとハンガリー事件以来このことは強調されてきた。ソ連は、世界市場価格は、資本主義的な投機価格であるから、それを補正して社会主義市場価格が決められると主張する。

すなわち、ビストロフは次のように述べている（「経済学の諸問題」一九六〇年二号）。

貿易および国際決済の重要な要素の一つは、輸出入の商品価格を固定することである。社会主義諸国間の取引は、公正かつ安定した価格でなされねばならないが、これらの価格は契約によってなされ、世界市場における各商品の価格に基づき、長期にわたってすえおかれる。資本主義市場の価格は、そのまま社会主義市場に適用されない。資本主義市場の価格は、非常に変動し易い投機性をもつ価格だから、社会主義市場のように、安定した価格によって取引を促進しようとするには適しないのである。

しかも社会主義市場では、資本主義市場のように一物に数個の価格がつくのではなく、一物一価を原則としている。もし若干価格に差があるとすれば、それは輸送費とか質的差のためである。

このように価格が安定しかつ固定していることは、社会主義諸国間の取引の計画化を可能にし、国際決済通貨としてのルーブルの購買力を安定させることになる。

(第10表) ソ連輸出平均単価

(単位 1ルーブル)

| 品目 | 単位 | 1959年 | | | 1958年 | | |
|--------|------------------|---------|---------|----------|---------|---------|---------|
| | | コメコン | アジア圏 | 自由諸国 | コメコン | アジア圏 | 自由諸国 |
| | | 石炭 | 1トン | 61.9 | — | 39.3 | 63.1 |
| 無煙炭 | 1トン | 99.5 | — | 68.3 | 92.6 | — | 80.9 |
| コークス | 1トン | 99.6 | 85.0 | 70.0 | 98.9 | 56.0 | 82.6 |
| 原油 | 1トン | 89.2 | 94.0 | 56.6 | 86.0 | 104.4 | 61.7 |
| マンガン鉱 | 1トン | 168.9 | — | 119.6 | 178.4 | — | 155.9 |
| クローム鉱 | 1トン | 174.1 | 155.4 | 110.6 | 170.0 | 156.3 | 140.8 |
| 石綿 | 1トン | 857.7 | 646.7 | 557.3 | 736.6 | 402.1 | 599.9 |
| 燐鉱石 | 1トン | 34.6 | — | 23.0 | 26.4 | — | 30.0 |
| 鋼塊 | 1トン | — | — | 254.8 | — | — | 279.1 |
| 亜鉛 | 1トン | 939.1 | — | 897.8 | 936.3 | — | 737.0 |
| 鉛 | 1トン | 1,184 | — | 795 | 1,168 | — | 784 |
| アルミニウム | 1トン | 2,078.3 | 2,533.3 | 1,869.3 | 2,089.4 | 1,826.4 | 1,866.8 |
| ベンゼン | 1トン | 333 | — | 319 | 300 | — | 279 |
| トルオール | 1トン | 338.1 | — | 283.0 | 351.2 | — | 327.9 |
| ナフタリン | 1トン | 391.9 | — | 411.4 | 408.7 | — | 323.6 |
| ピッチ | 1トン | — | — | 107.7 | 105.4 | — | 100.7 |
| テレピン油 | 1トン | 665.3 | — | 627.5 | 669.1 | — | 570.9 |
| 松脂 | 1トン | 721 | 714 | 730 | 732 | 737 | 744 |
| 精選燐鉱石 | 1トン | 71.1 | — | 61.3 | 73.0 | — | 69.0 |
| 綿製材 | 1 m ³ | 3,171.2 | 3,065.5 | 2,191.9 | 3,197.4 | 3,098.3 | 2,520.6 |
| 亜麻 | 1トン | 1,492 | — | 1,021 | 1,394 | — | 1,173 |
| 粗麻 | 1トン | 591.4 | — | 454.1 | 554.5 | — | 473.2 |
| 大麻 | 1トン | 1,372.5 | — | 801.6 | 1,319.7 | — | 580.0 |
| 羊毛 | 1トン | 7,000.8 | — | 10,403.2 | 7,181.2 | — | 8,866.4 |
| タバコ(葉) | 1トン | 5,776.4 | — | 4,987.3 | 5,777.5 | — | 5,236.7 |
| 挽材 | 1 m ³ | 85.2 | — | 80.3 | 85 | — | 70.7 |
| バルブ材 | 1 m ³ | 57 | — | 38.5 | 58.9 | — | 48.3 |
| 裸麦 | 1トン | 247.1 | — | 217.6 | 266.8 | — | 233.6 |
| 大麦 | 1トン | 287.0 | — | 212.7 | 254.6 | — | 214.1 |
| 燕麥 | 1トン | 225.2 | — | 209.9 | 195.1 | — | 176.7 |
| ひまわりの種 | 1トン | 475.5 | — | — | 475.3 | — | — |
| かに罐詰 | 1カン | 2,551 | — | 2,559 | 2,46 | — | 2,503 |
| 綿織物 | 1 m | 1.60 | 1.15 | 0.53 | 2.60 | 2.60 | 0.959 |
| 圧延鋼 | 1トン | 723.9 | 108.9 | 390.0 | 101.7 | 732.0 | 361.0 |
| 小麦 | 1トン | 310.0 | 319.0 | 247.0 | 314.4 | — | 257.0 |
| 半粗羊毛 | 1トン | — | — | — | 740.0 | — | 14,600 |

ソ連・東欧の貿易関係

四三(四三)

(第9表) ソ連輸入平均単価

(単位 1ルーブル)

| 品目 | 単位 | 1959年 | | | 1958年 | | |
|-----------|-----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| | | コメコン | アジア圏 | 自由諸国 | コメコン | アジア圏 | 自由諸国 |
| 銅 | 1トン | 2,976.7 | 2,500 | 2,622.5 | 3,286.7 | 3,025 | 2,266.5 |
| 小麦 | 1トン | — | 310 | 235.3 | 309.3 | — | 241.6 |
| 原油 | 1トン | 62.0 | — | 74.9 | 62.0 | — | 75.0 |
| 圧延鋼材 | 1トン | 326.7 | 1,506.1 | 856.9 | 560.2 | 5,063.7 | 707.3 |
| 綿織物 | 1 m | 2.2 | 1.3 | 2.5 | 2.3 | 7.5 | 2.9 |
| 苛性ソーダ | 1トン | 279.4 | 307.6 | 309.9 | 277.9 | 283.5 | 307.0 |
| エチル・アルコール | 1トン | — | 477.3 | — | — | 480.6 | 524.7 |
| メチル・アルコール | 1トン | 1,148.0 | — | 1,173.9 | 1,144.0 | — | — |
| 炭化カルシウム | 1トン | 359.2 | 339.1 | 360.0 | 391.1 | 339.8 | 360.0 |
| 絹織物 | 1 m | 3.1 | 3.2 | 2.0 | 2.4 | 5.0 | 2.5 |
| セメント | 1トン | 57.7 | 31.8 | 40.3 | 57.4 | 41.9 | 41.1 |
| 紙 | 1トン | 2,372.8 | — | 1,551.2 | 2,228.1 | — | 1,779.9 |
| 羊毛 | 1トン | — | 7,494.3 | 6,522.4 | — | 7,513.0 | 6,852.9 |
| タバコ(葉) | 1トン | 3,470.9 | 771.6 | 3,893.0 | 3,957.3 | 2,150.5 | 3,596.7 |
| 皮鞋 | 1足 | 17.7 | 18.3 | 23.0 | 16.9 | 17.6 | 22.3 |
| ゴム靴 | 1足 | 5,883 | 6,337 | — | 7,688 | 7,806 | — |
| 家庭用ミシン | 1台 | 292.5 | 180.1 | 231.5 | 274.0 | 180.0 | 231.2 |
| 毛織物 | 1 m | 9.1 | 15.8 | 15.7 | 10.7 | 19.0 | 16.1 |

それでは現実の貿易ではどのように価格がつけられていたであろうか。これを、一九五八年と五九年とについて算出したものが、第九表(輸入価格)、第十表(輸出価格)である。この計算は、ソ連の「貿易統計集」にあげられている商品の中から、質的差が比較できないと考えられるもの、および、単位当りの計算が可能なものを選びだし、商品別・国別に単位当り価格を計算し、これを、コメコン諸国、自由諸国に区分したものである。

この結果、主として原料品が計算の対象となったが、これは、ソ連が原料輸出を主としておこなっているといふことから、かえってこの計算の確率を高めると考えられる。

このようにして算出された表をみると、ソ連の輸出価格では、自由諸国に輸出する価格よりも、コメコン諸国へ輸出する価格の方が全体として高くなっている。また輸入に関しては逆に、コメコンからの輸入価格は、自由諸国からの輸入価格よりも安くなっているようにみられる。

四二(四二)

(第11表) 交易条件(輸出)

| (千ルーブル) | 年 | a. 自由価額 | b. 実際価額 | c. % | d. 実際輸出額 | d×(1-c) |
|---------|----|-----------|-----------|-------|------------|-------------|
| アルバニア | 58 | 21,262 | 28,979 | 73.2 | 177,200 | 47,489.6 |
| | 59 | 31,455 | 39,812 | 79.0 | 195,500 | 41,055 |
| ブルガリア | 58 | 386,181 | 252,040 | 153.0 | 802,300 | (-)425,219 |
| | 59 | 376,309 | 302,827 | 124.0 | 1,159,700 | (-)278,328 |
| ハンガリー | 58 | 357,377 | 459,027 | 77.9 | 802,200 | 177,286.2 |
| | 59 | 338,550 | 472,443 | 71.7 | 1,039,300 | 294,121.9 |
| 東ドイツ | 58 | 1,540,422 | 1,959,410 | 78.6 | 1,199,000 | 684,786 |
| | 59 | 1,649,849 | 2,199,257 | 75.0 | 4,120,400 | 1,030,100 |
| ポーランド | 58 | 378,434 | 483,297 | 78.3 | 1,507,200 | 327,062.4 |
| | 59 | 497,722 | 678,435 | 73.4 | 1,945,500 | 517,503 |
| ルーマニア | 58 | 348,939 | 499,217 | 69.9 | 1,005,600 | 302,685.6 |
| | 59 | 293,281 | 436,309 | 67.2 | 929,500 | 304,776 |
| チェコ | 58 | 414,594 | 542,944 | 76.4 | 1,787,000 | 421,732 |
| | 59 | 473,344 | 599,154 | 79.0 | 2,412,000 | 506,520 |
| 総計 | 58 | 3,447,207 | 4,224,914 | | 9,280,500 | 1,535,822.8 |
| | 59 | 3,660,511 | 4,728,237 | | 11,801,900 | 2,415,747.9 |

(-)はソ連が安く輸出したことを示す。

a. はソ連が自由諸国へ輸出する価格と同じ価格で、第10表の商品を、コメコン諸国へ輸出したと仮定したときの価額。b. は、第10表の商品の実際の輸出価額。

c. は $\frac{a}{b}$ の%、d は全輸出価額。

(第12表) 交易条件(輸入)

| (千ルーブル) | 年 | a. 自由価額 | b. 実際価額 | c. % | d. 実際輸入額 | d×(1-c) |
|---------|----|---------|---------|------|------------|------------|
| アルバニア | 58 | 19,310 | 22,951 | 84 | 56,200 | 8,992 |
| | 59 | 17,664 | 14,611 | 120 | 59,000 | (-)11,800 |
| ブルガリア | 58 | 120,804 | 118,315 | 101 | 812,200 | (-)8,122 |
| | 59 | 180,635 | 182,624 | 98 | 1,043,200 | 20,864 |
| ハンガリー | 58 | 77,796 | 47,487 | 164 | 647,700 | (-)414,528 |
| | 59 | 134,668 | 84,332 | 160 | 826,200 | (-)495,720 |
| 東ドイツ | 58 | 25,920 | 32,597 | 80 | 3,263,700 | 652,740 |
| | 59 | 20,410 | 35,897 | 66 | 3,557,900 | 1,209,686 |
| ポーランド | 58 | 109,580 | 101,472 | 108 | 1,060,600 | (-)84,848 |
| | 59 | 116,064 | 91,502 | 126 | 1,266,300 | (-)329,238 |
| ルーマニア | 58 | 38,405 | 38,996 | 98 | 934,000 | 18,680 |
| | 59 | 35,361 | 35,527 | 98 | 997,900 | 19,958 |
| チェコ | 58 | 256,222 | 176,258 | 145 | 2,048,400 | (-)921,780 |
| | 59 | 277,667 | 201,095 | 138 | 2,327,600 | (-)884,488 |
| 総計 | 58 | 648,037 | 538,076 | | 8,822,800 | (-)748,866 |
| | 59 | 782,469 | 640,588 | | 10,078,100 | (-)488,738 |

(-)はソ連が安く輸入したことを示す。

そこで、輸出の場合、もし、ソ連がコメコン各国へ、自由諸国への輸出価格と同じ価格で輸出すると仮定したとき、その差額はどれ位になるかを計算したものが、第十一表であり、これを輸入に関しておこなったものが第十二表である。

この結果、ソ連のコメコン貿易は、輸出・輸入の全体を通じて、かなりの「差額」があることになる。一九五八年は、輸出の差額一五億三五八二万二八〇〇ルーブル、輸入差額、七億四八八六万六〇〇〇ルーブル、合計二二億八四六万八八〇〇ルーブルとなる。

もし、われわれのサンプリングが正規分布であるなら、右の額がほぼ正しいし、もし、サンプリング以外は「差額」がなければ、表のa、bの「差額」だけだから一九五八年は八億八七六万八〇〇〇ルーブルとなる。現実にはおそらくこの中間であろう。

この「差額」を何と考えるかということはきわめて難しい問題であるが、二つの解釈が成り立つように思われる。一つは、この「差額」をもって、ソ連がコメコン諸国を収奪したという解釈である。たしかに、ソ連の国際収支は常に輸出超過となっているが(たとえば、一九五八年、輸出九二億八〇〇〇万ルーブル、輸入八八億二三〇〇万ルーブルで、四億五七〇〇万ルーブルの出超)、しかし、この「差額」を考慮にいれると、むしろ、入超となる(輸出額から輸出価格「差額」を差引き、輸入額は輸入価格「差額」を加えると、一八億二八〇〇万ルーブルの入超)。

そこで収奪という解釈もでてくるのであるが、この解釈には若干の疑問がある。(イ)このような明らかな収奪を、いかに権力国家とはいえ、コメコン諸国が黙認するということが考えられるであろうか。一九五五年ポーランドは明らかに石炭輸出によってソ連から収奪された事実があるが、これでさえ暴動によってソ連が譲歩している。そのあとで再びこのようなことを敢てすることはまずあり得ないことではなからうか。(ロ) 単位当り価格を世界市場価格と比較してみると次のように、世界市場価格は、自由諸国価格とコメコン諸国価格とかなり乖離しており、むしろ、自由諸国に対するソ連のダンピング傾向

1958年(ルーブル)

| | コモコン | 自由諸国 | 世界市場格 世価 |
|--------|-------|-------|-------------|
| 石炭(トン) | 63.1 | 48.1 | 97 |
| マンガム | 178.4 | 155.9 | 231 |
| クロム | 170 | 140.8 | 224 |
| 石綿 | 736.6 | 599.9 | 396 |
| 鉛 | 936.3 | 737.0 | 770 |
| 鉛 | 1168 | 784 | 1100 |
| アルミニウム | 2089 | 1866 | 2160 |
| 小麦 | 314 | 257 | 275 |

International Financial Statistics より作成。

ソ連の対東欧クレジット (百万ドル)

| 年 | クレジット | ソ連の対東欧クレジット (百万ドル) |
|-------|-------|--------------------------|
| 1947年 | 124 | 1956年 505 (20億2000万ルーブル) |
| 48 | 513 | 1957年 784 (31億3600万ルーブル) |
| 49 | — | 1958年 249 (9億9600万ルーブル) |
| 50 | 100 | 1959年 150 (6億ルーブル) |
| 51 | — | |
| 52 | — | |
| 53 | — | |
| 54 | 26 | |
| 55 | — | |

ECE: Economic Survey of Europe in 1957. Chap VI—pp. 55~57.
U.N.: World Economic Survey 1960. Chap 3. p. 120.

がみられる。そこで、コモコン諸国への輸出価格がソ連の生産価格であるのかも、しれない。とすればソ連は、ダンピングした分だけ損失を負担していることになろう(自由諸国との貿易は、全貿易額の約四分の一を占めている)。

いるのではないかとということである。もちろん信用供与は、無償で与えてしまうのではないし、またその貸与も長期にわたるものもあるし、一様ではないから、正確に「差額」と比較してみることは意義が少ない。しかも、将来再びソ連のもとへ返還されるものであるなら、やはりソ連の収奪であり、それが将来に延期されたにすぎないわけである。しかしそれにもかかわらず、ソ連の国内事情から考えてかなりソ連が無理をしていると推測される信用供与の源泉をこの「差額」に求めることはかなり興味ある推論ではなからうか。ことに一九五六年以後、急激にソ連のクレジット額が多額かつ定期的になってきたことは、ますますこの考えを裏づけるようにも考えられる。さらにこのクレジットは、使用条件を付けるから東欧圏の分業体制を、ソ連指導によって確立させることにもなるのである。

この解釈のいずれもおそらく極端な見方であって、現実には、ソ連は若干の余剰を残し、その余剰をクレジットという形で分配しているように考えられる。

(注) この単位当差別価格の計算は、

H. Mendershausen: The Terms of Soviet-Satellite: A Brodened Analysis (The Review of Economic & Statistics May, 1960)
The Soviet-East European Economy (Swiss Review of World Affairs, 1961. No. 2.3) 東京銀行月報, 1961年5月。

によってもなされているが、前者は、われわれの自由諸国価格に対し、西欧価格で比較をおこなっているもので、世界価格との比較をしていないし、また「差額」も多少歪みがある。後者は、そのとりあげた品目が少ないし、またその品目に質的差の大きいものが含まれている。しかし、われわれの計算も含めて、三者とも同じく「差額」がでてくるのは興味深い。前者はこの「差額」を貿易収支の入超と解しているし、後者は完全に収奪としている。しかし、後者の計算によっても、一九五五―五八年に六〇億ルーブルの入超となり、これは全く、同期間のクレジット総額と等しくなるのであって、われわれの推論を裏づけている。

〈付記〉

この論文は左の論文によって補充されるべきものである。
「共産圏問題」昭和37年1月号の拙稿。